
遊戯王 ~ After of Chronicle ~

黒宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王(After of Chronicle)

【コード】

N0331BA

【作者名】

黒宮

【あらすじ】

ある日、部屋で過ごしていた主人公は色々あって遊戯王GX……
「のような」世界に飛ばされましたとき。大体こんなお話です。

プロローグ（前書き）

まずはプロローグだけど、遊戯王ほとんど関係ない話だけです。

そして、作者は文才無いし遅筆だしデュエルタクティクスは低いしですが、よろしく願います。

プロローグ

「どうも、神様だ。さあ敬え」

いきなり出てきた女の子に言われた一言である。

「えっ……………」

「なんだ？その顔は」

「だっていきなり出てきて神様とか言われてもなあ…つかここは何処だよ」

周りを見れば暗闇、目の前には白い服きた長い銀髪の高校生くらいの女の子。

3

「ここか？ここは…まあ世界と世界の狭間とでも言っておこうか」

「なにその二次元的展開」

「まあ信じれないのも無理は無いが…………ふっ！」

バキッ！

！！？！！？！！？！！

「いつてえええ！？」

「まあこれで夢等ではないとわかっただろう？しかし折れたわけで

もないし大げさだな」

「いっつつつ…いや今思いつきり脛蹴ったよな!? しかもなんかバキッて聞こえたぞ!？」

「躩がなって無いのか？」

「いやスンマセンまじ勘弁してください本当」

何なんだ本当に…そして暴力に屈する俺情けねえ；

「…まあいい。幸先は不安だが選んでしまったものは仕方ないか」

「ああ…はあ…で、仮にあんたが神様だとして俺に何かあるんでしょーか？」

多少呻いていたが、なんとか復活して聞いてみる。

…あ、目が慣れてきたからかわからんがかなり可愛いぞこの神様。

「そうだろう可愛いだろうもっと敬って崇めてもいいんだぞ？」

「心読むなよ…そして今ので色々台無しだからな？」

考えた瞬間明らかにポーズをとり始める神様少女。一体なんなのだろうか。

「ふむ…まあ良いだろう。そろそろ本題に移るとしようか」

と、何処から出したのか高級そうな椅子に座る神様少女。

「さて……………GXか5D・sかどちらか選べ」

「まるで訳がわからんぞ」

偉そうに足を組んだ後に宣われた一言である。

「というかそれはあれか、遊戯王の話しなのか？巷で話題の転生とかトリップとかいう二次元的展開なのかまさに！？」

「意外と頭が回るじゃないか。誉めてやるからありがたく思えよ？」

「それはどうも…じゃなくてだなんだ…はあ、何か疲れた…」

しかし…ねえ…普通ならこんなこと信じれないけど、妙に現実味があるし、第一さつき凄く痛かったし……………うーむ。

「というか、何で俺なんだ？というかどうしてそんな二次元的展開にならなきゃいけないんだ？」

「む？…まあ私も一応心優しい神様だから答えてやろう。が、その前に少々概念的な話しをしなければいけないな」

とか言いつつ目の前の神様少女が足元を指差すと座布団が敷いてあった。

……………あれか？心優しいの部分に疑問を持ったからか？
とりあえず正座で座っておく。

「さて、先ずはだ。世界は単一では無く、幾つも並列した……………つま

り数多くのパラレルワールドが存在すると言ったら信じるか？」

「……………俺が自分の部屋からこんな場所に移ってるんだし、そう言われたら信じてしまうな」

「自分の考えはしっかり持つものだぞ？」

「たった今崩れたんだよ！」

心からの一言である。

「まあ柔軟だと思っておいてやろう。さて続きだが、そういった平行世界は自分と似た世界同士で引き合い、だんだんとまとまって行くという性質があるんだが…ああ、この似た世界と言うのは、i fの世界の事さ。ま、アニメやマンガに置ける原作と二次創作の関係とでも考えてくれればいい」

「ふむふむ……」

こんどは近くにある他の世界とくつつくんだ。これは現実と二次元の関係とでも言うておくか。つまり、お前のいた世界でテレビやマンガに出た作品は、確実に「違う世界」として存在していると言う事だな

……………えーと……………

「……………あゝ…つまり世界は一つじゃなくて、「もしも」の世界も含めて一つの作品の世界で……………あゝ……………うん、口に出すとわけわからん」

「全て理解しろとは言わんさ。が、その様子ならお前は「応理解出来たのだからうし、それでいい……………理解力もある、と……………」

うーん……………んん？

「で、それと俺がここに居るのにどういう関係が？」

「半端なのさ……………GXの世界も5D・sの世界も、その世界の規模がな。そして、世界と言うものは、異物が混ざると分裂してしまうんだ。その世界本来の流れと、異物が混ざった流れにな」

……………まさか。

「つまり、数合わせ…か？」

「ん、やはり頭の回転は良いようだな。色々切り捨てて言えばそんなものだ」

「え……………ないわ……………」

数合わせに人間一人の人生使うなよ……………

「ふむ……………冷静なんだな。普通はもっと怒り叫んで強引に押し倒してくるものだと思うんだが」

「途中から色々意味が変わってる気がするぞそれだと……………はあ……………なんか疲れたからそんな元気も出ないんだよ……………」

「若い内から苦勞するとは、大変だな」

誰のせいだよまったく…一応まだ17なんだけどもなあ。

「……………まあ…行くなら、GXかなあ…理由は何となくだけど」

「一応言っておくが、「基本的な構成がGX」の世界だが？」

「……………ま、なるようになるさ、多分」

「…決定だな。私が言うのもアレだが、精々楽しむといい」

……………う…意識が…

「……………しかし、断る事も出来たのに受け入れるとは、流されやすいんじゃないか？」

「……………え？」

「普通は聞くものだぞ、そういう事は」

……………

「……………ないわ……………！！！！？」

……………ううして、俺は異世界に行くことと、なった。

...^UUU

プロローグ（後書き）

以上、主人公世界を渡る。
という話でした。

次回からは本編のGX世界です。

第一話・何はともあれ異世界の様です（前書き）

今回ははじめてのデュエル回です。

それでは、どござい！

第一話・何はともあれ異世界の様です

「……………無いわ ……」

現在、多分どっかのホテルの一室。

神様少女と話して、意識が途切れたが目覚めたらベッドで寝てた。

そして、呆然としてるとベッド横のテーブルに手紙を発見。とりあえず読んでみると……………

・俺が元の世界で持っていたカードと一緒に送った事。

・今は原作的に開始直前であること

・次の日にはアカデミアの試験がある事

・金は非常に沢山用意してある事

・この世界での俺の名前は高原 遊緋>>たかはら ゆづひ<<であること

等々……………が分かった。

そして一言「……………無いわ ……」である。

「……………いや、名前変わるのはいけけどさ…」「遊」の字で…まあ考え
ても仕方ないか…」

とりあえず、手紙を畳んで適当にバスルームに向かう。

一度さっぱり、意識を覚醒させたい…

「……………ああ、世界は変わっても姿は変わらないのね」

そして鏡を見て一言。

その鏡に移るのは、前髪は目が隠れるくらいの長さで、ほかはギリギリ肩に届くか届かないかの長さ。パツと見男には見えないが、すぐに女とも言えない、良くて中性的、悪くて中途半端な容姿である。それに春物の上着を着ている姿が今の自分。

……………若干、若返ったような、幼くなったような…

「ま、いつか」

一々気にしていたらきりが無い気がしたので、とりあえず置いておいて顔を洗い再びベッドへ。

と、ベッド脇にいかにもな、結構大きいトランクケースを2〜3見つけたのでベッドに腰掛け適当に一つ開いて見る。

「うわ、予想通り過ぎる……………って、あれ？」

中身は予想通り以前の世界で自分が持っていたカード……………なのだ
が、どうにも持ってなかった様なカードも混ざっている気がする。

「うん？……………やっぱり増えてる……………まあ、多いにこした
事は無いか」

そのまま幾つか中のカードを手にとり確かめるが、明らかに持つて
なかったカードまであるのが確認できたが、まあ饒別かなにかだろ
うと思っておく事にする。

「……しかし、自分の事ながらこんなんでいいんだろうか……何かただ流され続けてるだけな気がしてならないな……お、あつたあつた」
何か、自分でも意外なくらいこの状況を受け入れてしまっている。
そんな自分に疑問を抱きながらも、三つ目のトランクケースを開くと、カードと一緒に入っている幾つかのデッキケースを発見。
その中の一つを手にとり開けてみると、そこにはやはり元居た世界で自分が組んでいたデッキが入っていた。

「……しかし、明日が試験か……もうちょい余裕を持たせて欲しかったな」

デッキケースを開く デッキをテーブルに並べるという作業を繰り返しながら思う。

とりあえず、明日使うデッキを選ばないといけなにか……

「……あれ？そう言えばシンクロとか大丈夫じゃ………無いよなあきつと……」

時代的に不味いだろうなあ……多分、きつと。

そしてシンクロがダメという事はエクシーズもだろうし、他にも本編で重要な役割を果たすカードも不味いか………なんか、あくまでも「似ている」世界とか言われたけど用心しといっても間違いは無いだろう。

と、言う事はだ。

「えーと、シンクロダメで、エクシーズは元々そんなに使って無いから………あとサイバー・ドラゴンとかも一応外して………ええと……あ

あもうチューナーも除いて…あれ？」

一つ一つ順番に見ていくが……全滅…だ、と…？

「いや、まてまて……むむむ」

参ったな…意外と気をつけないといけないカードが多いぞ…

「……仕方ない、せつかくだしーから作るか」

時間を見れば今は夕方の16時27分。今から組めば、そこそこは良いのが出来ると思う。

「……さてと、始めますかね」

理由やいきさつはどうあれ、来てしまったものは仕方ないし、いきなりつまづくなんて事態は避けたいしな。

「……しかし…この中から探すのか」

と、大きめのトランクケース二個と半分にギッシリ詰まっているカードを見ながら、そんな事思っただった。

（翌日）

「あ、危なかった……………」

現在位置、試験場。

終了時間ギリギリ、限りなくアウトに近いが試験終了ギリギリである。

更に言えば、到着したのはついさっきだったりする。

……………多少、寝坊はしたけどそこそこ余裕を持ってホテルを出たままでは良かったんだけどなあ……………まさか道に迷うとは思わなかった…

しかも、とある人物を見かけなかったら多分俺はここに居なかったな、と、視線を少し離れた場所にいる人物に向ける。

……………その人物　GX主人公たる遊城　十代が目の前を走り去ったのは全くの偶然であり、軽く絶望してた俺は十代を見かけた瞬間にわき目もふらずに追いかけて今に至っていた。

そして現在、俺と十代は二人揃ってそれぞれ試験官の前に立っている。

十代の反対側を見ればやはりと言つべきか独特な口調のクロノス先生がおり、自分の視線を前に向ければがっしりした体格の試験官が居る。

まあ流石に一人ずつはしないか：100人以上居るはずだし……十代のデュエルは生で見たかったんだがこればかりは仕方無いな。

「それでは、これより試験を開始する。何、緊張しないで、自然体で挑んでくれ」

「えーと…はい」

……とは言ったものね、やはり緊張してしまうなこれは…何か幾つも見線を感じるし……とにかく、鞆からデュエルディスクを取り出して腕につけ、同じく鞆からデッキを取り出してシャッフル&セツトする。

使い方は昨日覚えたし、デッキもなんとか完成した。後は全力を出すのみか…

「それでは、準備は良いかな？」

「…はい！」

「よろしい。それでは、これより試験を開始する！」

「デュエル！」

遊飛 : LP4000
試験官 : LP4000

「では、まず私のターン、ドロー！」

…ええー…言つたもの勝ちなのね……

「私は切り込み隊長を攻撃表示で召喚！さらに切り込み隊長の効果
を発動、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚出来る！こ
の効果で私はもう一体の切り込み隊長を攻撃表示で特殊召喚する！」
切り込み隊長 ATK1200 DEF400

……………これ、試験だよな？

未来ならいざ知らず、今の時代でそれはキツいんじゃないだろうか…

通称、切り込みロック。

切り込み隊長の特殊召喚の他のもう一つの効果、切り込み隊長がフ
ィールドに存在する間はほかの戦士族を攻撃出来ないという効果を
使い、隊長二枚を召喚する事で疑似的に攻撃不可能にするコンボで
ある。

「更に私はカードを一枚伏せてターンエンドだ」

試験官 : LP4000 手札 3
フィールド : 「切り込み隊長」×2
魔法罫 : 「セット」×1

「……すう……はあ……俺のターン、ドロー！」
深呼吸、そしてドロー。

「さて、先ずはあのロックを何とかしないと……えーと、手札……
は……え？」

……あれ？

「ん？何かあったのか？」

「あ、えー……いや、大丈夫です」

手札を見たまま固まっている俺を不信がったのか、試験官が声を掛けてきた試験官にとりあえず返事を返す。

が……全然大丈夫じゃ無い。

「無いわー……デッキ間違えるとか……」

そういえば、寝坊して慌てて出たからデッキを確認して無かったな
………デッキケースは全部同じだったし；

しかもこのデッキは……色々不味いかもしれない……が、

「やるしか無いよなあ……俺はモンスターをセット、カードを3枚
セットしてターンエンドです」

遊飛：LP4000 手札 2

フィールド：「セット」 x 1

魔法罫：「セット」 x 2

「では私のターン、ドロー！手札よりサイクロンを発動し中央の力
カードを破壊する！」

ソリッドビジョンによる突風が巻き起こり、セットしていたカード
を破壊される。

…流石ソリッドビジョン、昨日試しにモンスターを召喚したりした
けど、こっやって受ける側に立つとすごいな。

「破壊されたカードは聖なるバリア ミラーフォース です」

「正解と言ったところか。なら、私はコマンド・ナイトを攻撃表示で召喚！更に永続魔法、連合軍を発動！」

コマンド・ナイト

ATK1200 DEF1900

げ……

連合軍はフィールド上の戦士族又は魔法使い族の数×200、フィールド上の戦士族の攻撃力を上げる魔法カード。

それにコマンド・ナイトはフィールドの戦士族の攻撃力を400上げるうえに他のモンスターが居ると攻撃対象にならない効果まで持っている。

つまり……

「切り込み隊長」 ATK2200 ×2

「コマンド・ナイト」 ATK2200

うわ、1000も上がってるし…

というか本格的に戦士族ロックかよ。

「バトルフェイズ！コマンド・ナイトでセットモンスターを攻撃！」

「セットモンスターは魂を削る死霊、戦闘では破壊されません」

相手フィールドからコマンド・ナイトが飛び掛かってセット状態のモンスターに斬りかかるが、姿を表した死霊は切られても一瞬揺らいただけで何も変化は無かった。

「む、ならば私はこのままターンエンドだ」

試験官：LP4000 手札1

フィールド：「切り込み隊長」×2 「コマンド・ナイト」

魔法罫：「連合軍」「セット」

「俺のターン、ドロー！……さて、どうするかな……」

相手のフィールドはロックが完成してる………というのは実はあまり問題では無かったりする。やろうと思えばあのロックは崩せるのだ。

が、

「……やってもいいのか、これ……」

手札を見ながら考える。

問題は……その方法………というかそれを可能にするモンスターを召喚してもいいかどうかだったりする。

「うーん………ん？」

と、不意に視界の端に移った光景に視線を向ける。

「古代の機械巨人……もうそこまでか……」

十代の相手、クロノスのエースにして象徴とも言える古の巨人。

……という事は、この後は、確か……

「……ふう……全く、バカみたいにアレコレ考えても仕方無いか……もう少し、流れに身を任せるのも悪くない、かな」

そして、その巨人に相対する十代を見て、何かアレコレ悩んでいる自分がバカらしくなってしまった。

……そうと決まれば……！

「……よし……まずは、手札から魔法カード、テラ・フォーミングを発動！デッキからフィールド魔法、死皇帝の陵墓を手札に加えます！」

デッキから一枚、カードが飛び出してきたのを引き抜き手札に加える。

「そしてそのまま死皇帝の陵墓を発動！」

ディスクからフィールド魔法をセットする場所が現れ、発動。その一瞬の後に、中央に燃え盛る炎が立ち上る古墳（？）が現れる。

「………行きます……俺は、ライフを2000払い、レベル10のモンスターを召喚します！」

「何……レベル10だと!？」

試験官が何やら驚いてるが……あ、レベル10のモンスターなんてこの時代ほとんど居ないからか。

「まさかコイツを出す事になるなんて……」

古の大地より現れる！地縛神 Aslla piscu>アスラピスク<！」

「……！！！」

陵墓の内側から、まるで、大地を裂くように、砕くように、振り払うように、黒色の大鳥が現れる。

「地縛神 Aslla piscu」

ATK2500 DEF2500

遊飛：LP4000 2000

……何と言うか……出してしまったよ……；

一瞬八チドリの地上絵が現れたからまさかと思ってひやっとしたけど、大丈夫みたいだな。

……というか、室内だからか？何かアニメで見たより小さい気がするんだが……

「な……………地縛神…聞いた事のないモンスターだ……」

「あー…まあ、とあるイベントの時に偶然手に入れたんで……………えーと、では続けます！俺はこのままバトルフェイズへ！」

詳しく聞かれたら凌げる自信はないし、適当に濁して進める事にする。

「む？だが私のフィールドには切り込み隊長が2体存在する！これにより攻撃する事は不可能だ！」

「知ってます……………ですが…地縛神は相手プレイヤーにダイレクトアタック出来ます！」

「何！？その攻撃力でダイレクトアタックが可能だと！？？」

「その代わりに、フィールド魔法が存在しないと自壊してしまいますけどね。では、アスラピスクでプレイヤーをダイレクトアタック！」

「フィールド魔法…ならば、攻撃宣言時にリバーズカードオープン！サンダー・ブレイク！手札を一枚捨てて死皇帝の陵墓を破壊する！」

「させません！リバーズカード発動！地縛波>グラウンド・ウェーブ<！フィールド上に地縛神が存在する場合、相手の魔法、又は罫カードの発動を無効にし破壊します！」

「　　！！」

「くっ！」

発動した瞬間、アスラピスクが大きく鳴き声をあげ、衝撃波がサンダー・ブレイクのカードを破壊した。

「こんどこそアスラピスクでダイレクトアタック！吹き飛ばせ、地縛烈風！」

「ぐあああああっ！？」

試験官：LP4000 1500

宣言した瞬間、アスラピスクが大きく羽ばたいて上昇、そして一気に相手モンスターを飛び越え急降下して、最後に試験官の頭上で急停止しながら爆発的な暴風を作り出した。

……てか、何か適当に技名呼んだらそれっばい事してくれたよ……すごいなデュエルディスク。

「では、一枚カードを伏せてターンエンドです」

遊飛：LP2000 手札0

フィールド：「地縛神 Asilia piscu」 「魂を削る死霊」

魔法罫：「セット」x2

フィールド：「死皇帝の陵墓」

「く…確かに強力なモンスターだ…だが、攻略出来ない訳では無い！私のターン、ドロロー！私は手札を一枚捨てて、ライトニング・ボルテックスを発動する！」

あ…

ライトニング・ボルテックス…手札を一枚捨てて、相手フィールド上の表側モンスターを全て破壊する魔法カード。

その効果により、頭上から稲妻がアスラピスクと死霊を貫き、破壊する。

「ゆくぞ、バトリ…この瞬間、墓地に存在するアスラピスクの効果発動！」なんだと!？」

試験官がまだ有るのかという顔をしている。

…まあ最上級でフィールド魔法依存とはいえ、今の時代で2500ダイレクトって時点で既に強力だからなあ…;

「アスラピスクが自身の効果以外でフィールドを離れた時、相手フィールド上の表側モンスターを全て破壊！更に、破壊したモンスターの数、800ポイントダメージを与える！」

「な、な…!？」

大地を砕くエフェクトと共に、アスラピスクが現れて翼を大きく羽ばたかせ、衝撃波とも言える風を放ち相手モンスターを、更に試験官をも襲った。

「ぐ、うわあああああ!?!」

試験官：LP15000

.....あれ?

「あ.....ついライフ8000の感覚でやっちゃった!」デュエル終了となり、ソリッドビジョンが消える。

.....そして、再び感じ始める視線。しかもかなり多い。そしてちらっと見れば一足先に決着がついていたのか十代とクロノス先生までこっち見てるし。

「.....あー...その、あ、ありがとございました!」

すごく...逃げたいぞ、これ.....

続く...

第一話・何はともあれ異世界の様です（後書き）

……デュエルって、難しいorz

そしてあっさりしすぎている気も…；

何はともあれ、今回は主人公の初デュエル回でした。

これからどうなるかは…作者にも分かりませんが、結構行き当たりばったりです；

それでは、また次回…

第二話・明らかになる事実というか状況（前書き）

今回は色々とせて…主人公の現状が発覚します。

更に、知ってる人は知ってるあのゲームからキャラが登場します。

……とりあえず、キャラ崩壊注意です。

これでいい自信がないorz

ではどござー！

第二話・明らかになる事実というか状況

「……………眠い、暇だ」

現在、アカデミア行きの船の中である。

船旅というのは存外暇なものであり、最初のうちは船首等に出て外や他の生徒の様子を見てたりしたのだが、一時間もすると流石に飽きてきたので、今は休憩スペースとなっている広い船室で横になつてたりする。

が、眠れない。

「……………生活リズム崩しちまったなこれは……………はあ……………暇だ……………」

いよいよアカデミアって事で全てのデッキを確認したのが不味かったか……………試験が終わった後にも、増えたカードのおかげで幾つかデッキ作ってたし……………というか今までずっとホテル暮らしをするはめになるとは思わなかったな……………;

ただ、結構な間高い部屋取っててもまだまだあまりある資金にはびびったな。

いつの間にか財布に入ってた銀行のカード使ってみたら口座の中身8桁越えてたという……………

まあそのおかげで、遠慮なくカードを買ったり遊んだりと自由が出来たから良かったけど。

そうして出来ていった私物は、ほとんどアカデミアの方へ送ってあ

る。

正確には、アカデミアのオシリス・レッド寮に。

そう　　オシリスレッド　　である。

…あれか、遅刻したら問答無用でレッドか。自惚れるつもりは無いけどもしかしたらライエローかな〜と思ってたんだけどなあ。というかレッドって確か何人かと共同だったよな…苦手なんだよなそういうの…って言うか、今思ったけど同室の人が居るんじゃないか…はつきり言ってみせれないカードが幾つもあるし。

三邪神とか、ブラックマジシャンとか、ブルーアイズとか、ユベルとかサイバーもだし、あとシンクロモンスターにエクシーズモンスターもアウト。

……いや、ギリギリだけど、サイバーは大丈夫だったか。少数だ

けど出回ってたし。ただ、それでもサイバーエンドとかは不味いな
となると問題は…

「……やっぱり地縛神だよなあ……」

そう、試験官とのデュエルで使ってしまった、地縛神 Asilia
p i s c u > アスラ ピスク。

あれだけは本当に不覚だった。他のデッキならばまだ何とか出来た
かもしれないが、よりによって間違えて持ってきたデッキが、フィ
ニッシャーが地縛神しかない完全特化のデッキだった。

更に、問題はまだあった。

地縛神が アスラピスク しか入っていなかったのである。

元々、あのデッキは元いた世界で趣味で作ったデッキである。
地縛神のサポートカード、または相性の良いカードや単純に強いカ
ードを組み込み、地縛神は「全て一枚ずつ」入れていたのだ。

それが試験の後にデッキを見てみれば地縛神はアスラピスクのみで、

他の地縛神のカードの代わりに適当な上級モンスターや魔法、罫が入っていたのだった。

そして極めつけに…

「…お前だもんなあ」

(きゅ?)

自分の横でぐったりと突っ伏してる 黒い鳥 を横目で見る。

そいつは黒くて。

そいつは鳥のようで。

しかし良く見れば違って。

どうみてもそいつは。

小さくデフォルメされたアスラピスクでしたとき。

……いや、きゅ？つて…仮にも地縛神だろお前…

とは思うのだが、船室のマットの上でぐったりしてる姿を見てるとアニメみたいな威圧感も何も無かったりする。

……思い返すのはやっぱり試験後の夜。

何かもう色々と疲れてホテルに帰ってきた俺がベッドに倒れて寝ようとした瞬間、ポフツとこいつが腹に落ちてきたのである。しかも実体化した状態で。

大きさが小さめの鷲(?)くらいのサイズのこいつに、不意討ちで多大なダイレクトダメージを受けた俺は盛大にパニックってた記憶がある。

……いやあ、あの時は焦った。まさかのダークシグナーフラグかとも思ったが、結局何をするでもなく無気力そうにしているだけであり、結局現在まで何も起きなかったのだった。

「……ていつかお前実体化してるだろ？」

「きゅ〜」

肯定の意。

「……まあ、今は誰も居ないからいいけど、気をつけるよ？言い逃れる自信は無いし」

「きゅ〜」

べた~~~~。

……本当に地縛神の威厳も何もありゃしないな；

見てるだけで脱力してくるので視線を天井に向け、ふと腰に着けてあるデッキケースを触る。

腰の、ベルトに引っ搔けるタイプのデッキケース、それが4つ。

その内の一つを開け、中身を取る。

「……… 荣誉の贄…地縛旋風…… フィールドバリア… 死皇帝の陵墓
……… うん、封印安定だな」

「きゅ!?!」

「だって、さすがにライフ4000でお前の効果はヤバすぎるわ。
それに特化したら簡単に召喚そしてすぐゲームエンドであるし」

「きゅっ!きゅっ!」

「いて、こら、つつくな」

手に取ったデッキ…もはやアスラピスク特化となった【地縛神】デッキを見て放った一言にかなり過剰に反応された。

……… まあ理由はそれだけじゃないんだけど、な…っていつか今更だ
けどなんで「きゅ」なんだ?…… って、いてて；

「まてまて落ち着け、何もお前を使わないとまでは言ってるから

な・そのためにとりあえずこの二つを用意してあるんだから……」

と、言いつつ起き上がり腰に付けてあるデッキケースの内の二つを示す。

一応、フィールド魔法を使用するデッキであるため、アスラピスクを投入出来るし、言っちゃ悪いがアスラピスク無しでも十分戦える構築ではある。

というか、既に出来ていたデッキを多少弄ってそうした……と言った方が良いか。

試験から今までの間、幾つかの大会やフリーデュエルに出てはみたが、その度にこいつはデッキに入りたがるし、召喚されたがる。

普段は無気力なくらいだらうとしているのにそういう時だけ妙にやる気が出ているのである、この小さな地縛神は。

と、いう訳でなし崩し的に、俺が使うデッキはフィールド魔法を使うデッキが増えてしまったのだ。

……まあ、まだ使わないデッキも多いんだけど。

そして、今示した二つは比較的以前からフィールド魔法を入れたデッキである。

……片方は扱いが難しい上、場持ちが良くなって、もう片方はチューナーが入ってたりするが。

しかも両方とも今現在の時代には無いと思われるカードで構成され

ている……が、もし聞かれたらここら辺はイベント限定で手に入れたとかそういう理由で誤魔化す事にした。気にしてたら何も出来ないとも言つ。

「はあ……ということだから、分かったろ？」

「きゅ……………」

「あれ？アスラピ」「ううううううきもちわるいいですううう」と

渋々、という風に頷くアスラピスク。

と、その姿がすうーっと消えたかと思った瞬間、船室の扉の一つが開いて、オベリスクブルーの制服に身を包んだ女子生徒が三人ほど入ってきた。

「うううもつだめですあたまがくらくらしますうう」

「まさか私が酔い止めを忘れるなんて……………とりあえず横になって下さい。そうすれば少しは横になるはずですよ」

「……………（にくじり）」

……………あれえ、なんか見覚えがあるぞあの三人。

肩まであるか無いかくらいの茶髪の娘に、
眼鏡を掛けた緑髪の娘と、
銀髪ツインテールの娘。

「……………え、いや、え……………マジかよ……………」

俺の記憶が正しければ、あの三人は……………

茶髪 〓 宮田ゆま
眼鏡 〓 原麗華
銀髪 〓 レイン恵

タッグフォーすでお馴染み？になってる三人じゃないですかやだなにこれどういう事ー！？

あれか、もはやタッグフォーすもゲーム的に公式だから出てきても問題無いのか！？

確かに今やつてるZEXALに何かどつかで見たことあるモブが出てるとは聞いたけどさ……………いや、まてよ……………このいうのも含めて「似ている世界」なのか？

「……………もつだめですくるしいです……………」

「喋らないでゆっくり目を閉じて下さい。下手に騒ぐと尚更辛いですよ……………」

「…………………………(じくじく)」

上から宮田ゆま、原麗華、レイン恵である。

というか盛大に船酔いしてるのなゆま……………はあ、見てらんないな……………」

「その子、船酔い？」

「え？はい、確かに船酔いですが……………」

見かねて声を掛けてみると、通称「委員長」こと原麗華が返事を返

してくれた。

「よっ、と……ならこれ飲ませると良い。あと水も。その様子だと、酔い止め使った訳じゃないみたいだし、これ飲めば少しは楽になるだろ……。ちなみに、この水はもちろん口は付けてないしそもそも開けてもいないからな」

立ち上がり、近づきながら持っていた鞆から一応買っておいだ酔い止めと買ったのはいいけど結局飲んでない水のペットボトルを取りだしそのまま差し出す。

「あ……すみません、助かりました」

「いや、気にすんな。買ったのはいいけど無駄になりそうだったし……。それじゃ、何か気が引けるし俺は行こうかな」

「あ、その前になm」「ううう……あ、な、なんかきそ、う……きもちわるい……」「え！？み、宮田さんしっかりして下さい！？」

あゝあ、重症だなアレは……。今更だが、酔ってから酔い止め飲んで効果あったっけ？……なんか船のる前に飲む気がしてきたな……。うん、頑張ってもらっししか無いなどちらにしても。

等と思いつつ、船室を後にするのだった。

……なんか悪い事したかな？あの状況で出るって事は見捨てるようなもんか……？

いや、だけどうっかり名前で読んだりしたら不味いし……というかそもそも女の子三人も居て留まれる程俺は女慣れしてないし。

……はあ、まあいいか。とりあえずタッグフォースのキャラも居る
って事は確認出来たし、甲板にでも出てみるか。

（船室）

「うっ……もう、あんなのはいやだよ……」

「なら、次からはちゃんと準備をして下さいね？」

「あっ……肝にめくじておきます……」

うっ………だけどもまだ頭がぐらぐらする……

「それと、名前を聞きそびれてしまいましたがあのおシリスレッド
生にはちゃんと謝っておかないといけませんね」

「………あの人……試験会場で見た」

「本当ですか？」

「………うん」

「では、名前も知っていますか？」

「……………高原 遊飛」

「……う？……それって、もしかしてあの……えーと……地縛神……
ってモンスターを使った人……だったっけ？」

まだ横になってる私の隣で、今は座りながら話てる二人の話を聞いていると、印象に残っていた名前が出てきた。

「……………うん」

「あ、やっぱりそうだったんだ………凄かったなああの時は。もう一人の……えーと……遊城 十代君だったっけ？そっちも凄かったなあ……あう……」

まだぐらぐらする……

でも、本当に凄かったなあ。

E・HEROっていうモンスターもかつこよかったし、しかもあの攻撃力3000のモンスターを倒して逆転しちゃうんだもん。

それに、さっきの高原 遊飛君も、地縛神っていうモンスターは凄かったし、コストは払ったけど一回もダメージ受けないで勝っちゃったし。

「ふむ……私は実際に見た訳では無いですが、そこまで凄かったのですか？」

「あ…原さんは中等部の繰り上がりなんだっけ？」

「はい。ですが、その時は別に私用が入っていたので…」

なるほど…

私とレインちゃんは高等部からの編入組だから、生でみたんだよなあ。

あ、ちなみにレインちゃんとは試験の時に、会場無いで道に迷った所を助けて貰ってから仲良くなってアドレスまで交換したんだ。それで、原さんは私が船酔いし始めてレインちゃんが介抱してくれてる時に声を掛けてくれたんだ。

……あれ？私誰に説明してるんだろ？

ま、いいや。

「なるほど…凄かったですよホント！こう、ばぁーんってなってドーンってなってバリバリって感じなんです！」

「もうちょっと具体的に説明して下さい」

「……………（じくり）」

「あう」

「はあ…ですが、それだけ元気になれば大丈夫でしょう。相手の名前も分かりましたし、あちらに着いたらこれを返ってきて下さいね？」

「分かりました」

原さんから余った酔い止めを受け取って、鞆に入れておく。

「……………時間」

「あら？もう到着時間ですか……………所で、宮田さん？」

「え、はい？」

「その…何で敬語なのでしょう？」

「えーと……………何となく使わないといけない気がしたから、かな？」

「……………そう、ですか」

「??？」

続く…

第二話・明らかになる事実というか状況（後書き）

……ヤバい、全然わかんないぞ特にゆまorz

彼女が好きな人には特に申し訳ないですorz

そして相変わらずアツサリした中身……ですが、このままサクサクと進めよう思います。

では、また次回で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0331ba/>

遊戯王 ~ After of Chronicle ~

2012年1月4日01時52分発行